

臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

- 1 眼球の組織像を別図 1 に示す。
機能はどれか。
a 房水の産生 b 瞳孔径の調節 c 血液網膜関門
d 視細胞外節の貪食 e 角膜透明性の維持
- 2 10 歳の男児。矯正視力は両眼ともに 1.2。2 型 2 色覚と診断されている。石原色覚検査表の第 1 表を別図 2 に示す。
男児はこの表をどう読むか。
a 読めない b 1 または 2 c 12 d 18 e 28
- 3 隅角写真を別図 3 に示す。
正しい組合せはどれか。2 つ選べ。
a ㉠—隅角離開
b ㉡—隅角結節
c ㉢—周辺虹彩前癒着
d ㉣—生理的隅角血管
e ㉤—Sampaolesi 線
- 4 58 歳の女性。眼底検査で異常を指摘されて、視野検査を受けた。眼底写真を別図 4 に示す。
推定される視野検査の結果で正しいのはどれか。
a 中心暗点 b 輪状暗点 c 鼻側階段 d 求心性視野狭窄 e 下半視野の異常
- 5 OCT 所見を別図 5 に示す。
正しいのはどれか。2 つ選べ。
a 厚い黄斑前膜がみられる。
b 黄斑浮腫は漿液性網膜剝離による。
c 黄斑浮腫は中心窩の鼻側よりも耳側で顕著である。
d 嚢胞様黄斑浮腫は視神経乳頭黄斑線維束に著明である。
e 中心窩を中心とする直径 1 mm 内の平均網膜厚は 526 μm である。
- 6 31 歳の女性。右眼の霧視と充血を自覚したため来院した。配偶者が駆梅療法を受けている。STS 法、TPHA 法はいずれも陽性。右眼前眼部写真を別図 6 に示す。
保健所への届け出で正しいのはどれか。
a 直ちに届け出を行う。 b 7 日以内に届け出を行う。
c 1 か月以内に届け出を行う。 d 定点医療機関であれば届け出を行う。
e 届け出を行う必要はない。
- 7 生後 1 か月の乳児。生来右眼の内側部に隆起があり、眼脂もみられる。精査目的で来院した。外眼部写真と頭部 MRI 画像を別図 7A, 7B に示す。
診断はどれか。
a 血管腫 b 涙腺腫瘍 c リンパ管腫 d 眼窩蜂巣炎 e 先天性涙嚢ヘルニア
- 8 67 歳の男性。左眼の腫瘤を主訴に来院した。前眼部写真を別図 8 に示す。
適切な処置はどれか。
a 穿刺排膿 b 化学療法 c 放射線治療 d 眼窩内容除去術 e 切除とヘルニア門閉鎖

25 48 歳の男性。1 年前に全身の悪性リンパ腫と診断され、化学療法中である。左眼の霧視を自覚したため来院した。前眼部に炎症所見はない。左眼眼底写真を別図 25 に示す。

治療はどれか。

- a 抗結核薬内服 b アシクロビル点滴静注 c 抗真菌薬硝子体内注射
d ガンシクロビル硝子体内注射 e メトトレキサート硝子体内注射

26 46 歳の男性。数か月前から右眼に霧視があり、悪化したため来院した。視力は右 0.1(0.2× +16.00 D ⊂ cyl -1.00 D Ax 180°), 左 0.1(0.3× +17.00 D ⊂ cyl -1.50 D Ax 180°)。眼圧は右 15 mmHg, 左 12 mmHg。右眼眼底写真と超音波 B モード像を別図 26A, 26B に示す。

治療はどれか。

- a 副腎皮質ステロイド後部テノン嚢下注射 b 副腎皮質ステロイド全身投与 c 硝子体内ガス注入
d 強膜開窓術 e 強膜内陥術

27 28 歳の男性。1 週前から両眼のかすみを自覚して、近医を受診した。眼底出血を指摘され加療目的で紹介された。身長 172 cm, 体重 82 kg。高血圧と高脂血症および糖尿病の既往はない。矯正視力は両眼ともに 0.9。両眼の眼底写真と OCT 像を別図 27A, 27B に示す。

この症例で直ちに行うのはどれか。

- a 血液検査 b 蛍光眼底造影 c トリアムシノロンアセトニド後部テノン嚢下注射
d 抗 VEGF 療法 e 汎網膜光凝固

28 65 歳の男性。1 週前に川にかかる鉄橋が傾いて見えるのに気づき、自分で描いた見え方の絵を持参して来院した。外傷の既往はない。2 年前から糖尿病の治療を受けている。持参した絵を別図 28 に示す。

正しいのはどれか。

- a 左眼上斜視である。 b 右眼は内方回旋をしている。
c 頸を左に傾けると症状は軽快する。 d 自然治癒の可能性は 50% 以下である。
e プリズムによる治療は右にベースアップで貼る。

29 34 歳の女性。左眼の疼痛と眼瞼下垂を訴えて来院した。前眼部写真と Hess 赤緑試験および頭部 MRI 画像を別図 29A, 29B, 29C に示す。

正しいのはどれか。

- a 耳鳴がある。 b 下方視時に複視がある。 c 脈波の増大がみられる。
d 副腎皮質ステロイドの内服を行う。 e 再発はまれである。

30 63 歳の女性。数年前から右眼の眼位異常を指摘され、治療を希望して来院した。9 方向眼位写真と頭部 MRI 画像を別図 30A, 30B に示す。

正しいのはどれか。

- a 共同性の斜視である。 b 外眼筋の欠損がある。 c 異常神経支配がある。
d 筋付着部の異常がある。 e 機械的な眼球運動制限がある。

31 68 歳の女性。2 週前の起床時に右眼が暗く見え、改善しないため来院した。視力は右 0.4(矯正不能), 左 0.7(1.0× +0.75 D)。前眼部と中間透光体に異常はない。右眼眼底写真と Humphrey 視野(30-2 プログラム)検査の結果を別図 31A, 31B に示す。血沈と CRP に異常はない。

正しいのはどれか。

- a 右眼に眼球運動時痛を認める。 b MRI で右視神経に異常を認めない。
c ステロイドパルス療法を行う。 d 視力低下と視野障害は進行する。
e 1 か月以内に反対眼の発症を来す。

- 32 76歳の女性。眼瞼下垂を主訴に呼吸器内科から紹介された。顔面の赤外線写真を別図 32 に示す。
診断に有用な点眼薬はどれか。
a 0.01% ブナゾシン塩酸塩 b 0.1% ブリモニジン酒石酸塩 c 1% アプラクロニジン塩酸塩
d 1% ピロカルピン塩酸塩 e 5% フェニレフリン塩酸塩
- 33 Goldmann 圧平眼圧測定時の細隙灯顕微鏡写真を別図 33 に示す。
眼圧測定時の正しい位置はどれか。
a ① b ② c ③ d ④ e ⑤
- 34 40歳の女性。健診で異常を指摘されたため来院した。視力は両眼ともに 1.2(矯正不能)。眼底写真と OCT の結果を別図 34A, 34B に示す。
正しいのはどれか。2つ選べ。
a 進行することが多い。 b 乳頭の発達異常である。
c 緑内障治療薬を点眼する。 d 視神経乳頭の上にノッチを認める。
e 視神経乳頭血管起始部が上方にシフトしている。
- 35 75歳の女性。夕方から右眼眼痛と視力低下を自覚していたが、徐々に痛みが増強し、激しい頭痛と嘔吐を伴うため、深夜に救急外来を受診した。眼圧は右 64 mmHg, 左 12 mmHg。右眼前眼部写真を別図 35A に示す。既往は特にない。治療経過中に撮影された前眼部 OCT 像を別図 35B に示す。
治療による経過で正しいのはどれか。
a ① → ② → ③
b ① → ③ → ②
c ② → ① → ③
d ③ → ① → ②
e ③ → ② → ①
- 36 74歳の女性。植木の手入れ中に転倒し、救急搬送された。添え木(芯は金属)が右眼内側に刺さり自己抜去した。創部痛、頭痛、嘔気を訴えている。視力は右 0.3(0.8× -2.25 D)。眼圧は右 22 mmHg。細隙灯顕微鏡検査および眼底検査に異常はない。創部の写真を別図 36 に示す。
まず行うべき検査はどれか。
a 視野検査 b 牽引試験 c 超音波 B モード検査 d 頭部 X 線 CT 検査 e 眼窩 MRI 検査
- 37 24歳の男性。野球の試合中、右眼にボールが当たり視力低下を訴えて来院した。視力は右 0.8(矯正不能)。眼圧は右 10 mmHg。右眼眼底写真を別図 37 に示す。
正しいのはどれか。
a 経過観察 b 網膜光凝固 c 抗 VEGF 薬硝子体内注射 d 強膜内陥術 e 硝子体手術
- 38 55歳の男性。工事現場で作業中、右眼に何かが当たり、視力低下を自覚したため来院した。視力は右 0.7(矯正不能)。眼圧は右 16 mmHg。右眼細隙灯顕微鏡写真と超音波 B モード像を別図 38A, 38B に示す。
適切な対応はどれか。
a 経過観察 b 眼窩 MRI 検査 c 抗菌薬頻回点眼 d 抗菌薬硝子体内注射 e 硝子体手術
- 39 85歳の女性。左眼白内障手術後、眼底に異常所見がみつき、精査加療のために来院した。視力は左 0.3(0.8× -0.50 D ⊂ cyl -0.50 D Ax 90°)。左眼眼底写真と超音波 B モード像およびインドシアニングリーン蛍光眼底造影検査の中期像を別図 39A, 39B, 39C に示す。
診断はどれか。
a 加齢黄斑変性 b 転移性脈絡膜腫瘍 c 限局性脈絡膜血管腫
d 無色素性脈絡膜母斑 e 無色素性脈絡膜悪性黒色腫

- 40 23 歳の女性。1 か月前から右眼の視力低下を自覚したため来院した。右眼眼底写真を別図 40 に示す。
適切な対応はどれか。
a 経過観察 b 網膜光凝固 c 気体網膜復位術 d 強膜内陥術 e 硝子体手術
- 41 57 歳の男性。苛性ソーダが右眼に飛入し、受傷翌日に来院した。受傷翌日と 7 日後の前眼部写真および生体染色写真を別図 41A, 41B に示す。
現時点で適切な治療はどれか。
a 輪部移植 b 羊膜移植 c 全層角膜移植 d 表層角膜移植 e 消炎と感染予防
- 42 75 歳の女性。左眼の視力低下と外出時の羞明を自覚して来院した。視力は左 0.1(0.4×-2.00 D ⊂ cyl-1.00 D Ax 90°)。眼圧は左 15 mmHg。細隙灯顕微鏡写真と前眼部 OCT 像を別図 42A, 42B に示す。
適切な治療はどれか。
a EDTA 点眼 b 治療的レーザー角膜除去(PTK) c 角膜表層切除
d 深層層状角膜移植 e 全層角膜移植
- 43 63 歳の男性。3 日前に左眼白内障手術を受けた。手術翌日は裸眼でよく見えたが、昨日から二重に見えるようになったため来院した。視力は左 0.5(1.2×+1.00 D ⊂ cyl-1.75 D Ax 180°)。角膜乱視は-1.75 D Ax 164°。左眼前眼部徹照写真と角膜屈折力マップを別図 43A, 43B に示す。
適切な治療はどれか。
a コンタクトレンズ処方 b Nd:YAG レーザー c 眼内レンズ位置修正
d 眼内レンズ交換 e エキシマレーザー屈折矯正手術
- 44 65 歳の男性。6 か月前から左眼の視力低下を自覚して来院した。視力は左 0.8(矯正不能)。細隙灯顕微鏡写真を別図 44 に示す。
適切な治療はどれか。
a 副腎皮質ステロイド点眼 b Nd:YAG レーザー c 前房洗浄
d 眼内レンズ交換 e 硝子体手術
- 45 眼科手術時に使用する器具を別図 45 に示す。
この器具を用いる術式はどれか。
a LASIK b 全層角膜移植術 c 隅角癒着解離術
d トーリック眼内レンズ挿入術 e 涙嚢鼻腔吻合術
- 46 右眼斜視手術で術者から見た術中写真を別図 46 に示す。
適応となる疾患はどれか。2 つ選べ。
a A 型外斜視 b 下斜筋過動 c 固定内斜視 d 交代性上斜位 e Brown 症候群
- 47 6 歳の女兒。眼位異常を訴えて来院した。交代遮閉試験では上方視で 50 プリズム外斜視、下方視で 20 プリズム外斜視がみられた。9 方向眼位写真を別図 47 に示す。
適切な治療法はどれか。
a 右眼の外直筋後転術(上方移動併用)と内直筋短縮術(上方移動併用)
b 右眼の外直筋後転術(下方移動併用)と内直筋短縮術(上方移動併用)
c 両眼の内直筋短縮術(下方移動併用)
d 両眼の外直筋後転術(上方移動併用)
e 両眼の下斜筋後転術(前方移動併用)

48 50歳の男性。糖尿病の既往があり、5年前に近医を受診して糖尿病網膜症と診断されたが放置していた。数か月前から左眼の視力低下を自覚し、数日前にほとんど見えなくなったため来院した。視力は右1.2(矯正不能)、左0.04(矯正不能)。眼圧は右13 mmHg、左20 mmHg。両眼の隅角に新生血管はみられない。左眼眼底写真を別図48に示す。

まず行うべき治療はどれか。

- a 抗 VEGF 薬硝子体内注射 b トリアムシノロンアセトニド後部テノン嚢下注射 c 網膜光凝固
d 硝子体手術 e 線維柱帯切除術と硝子体手術の併用

49 90歳の女性。元来近視が強く、左眼は黄斑円孔網膜剝離で失明している。右眼白内障手術を近医で受けて自覚症状は改善したが、眼底異常を疑われ紹介されて来院した。視力は右0.08(0.7×-4.50 D ⊂ cyl-1.00 D Ax 90°)。右眼眼底写真とOCT像を別図49A, 49Bに示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察 b 胸部 X 線 c 眼窩 X 線 CT 検査
d 抗 VEGF 薬硝子体内注射 e 硝子体手術

50 78歳の男性。半年前に近医で左眼の白内障手術が施行され、視力は改善したが、数日前から急に見えにくくなり来院した。視力は左0.08(矯正不能)。左眼前眼部写真と眼底写真を別図50A, 50Bに示す。

原因裂孔が最も疑われる位置はどれか。

- a 黄斑円孔 b 2時半周辺部 c 3時半周辺部 d 10時半周辺部 e 12時半周辺部